

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年10月31日

| | |
|-------------|-------------------|
| 派遣者氏名（専門分野） | 福野 江里子 （ フランス文学 ） |
|-------------|-------------------|

下記のとおり報告します。

記

| | |
|-------|---|
| 研究テーマ | Gérard de Nerval - <i>Les Filles du feu</i> における諸要素の対照と対応について |
|-------|---|

派遣期間

2011年 8月23日 ～ 2011年 9月2日

| 訪問研究機関 | 国 | 都市 | 訪問機関 | 受入研究者 |
|--------|------|----|-----------|-------|
| | フランス | パリ | フランス国立図書館 | なし |
| | | | | |
| | | | | |

派遣先で実施した研究内容

< プログラム参加の目的 >

報告者はこれまで、19世紀フランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル（Gérard de Nerval, 1808-1855）を研究対象とし、考察を進めてきた。修士論文においては、後期作品 *Les Filles du feu* (1853) 所収の短編 *Sylvie* を扱い、作中にみられる諸描写の対比について考察している。*Sylvie* を含めたネルヴァル後期の作品群は、今日にいたるまで未だ読み解き難い問いを残し、多くの論考が重ねられ続けている中、考察を進める上で参照の必要を感じながらも入手困難な文献にあたることも少なくない。従って、フランス国立図書館にて実施された本プログラムにおいては、日本国内では参照困難な文献資料、具体的には、出版当初から今日までに出版された *Les Filles du feu* および *Sylvie* の年代ごとの序文、そして過去50年の間に出版された各研究書の包括的な閲覧を目的とし、作業の基軸とした。

< 実施した研究内容 >

Les Filles du feu および *Sylvie* の年代ごとの序文に関しては、1886年から2008年までに出版された版を閲覧した。ここでは、狂気と幻想、神秘主義への傾倒といったイメージが定着していた初期の段階から、徐々に、作品の持つユーモアやアイロニーといった、多様な側面に光が当てられていく段階まで、初期の貴重な資料も含めて、作品理解の過程を自分なりに辿り、確認することができた。また、初期の版から1940年代頃の版にかけては、当時の挿絵画家による挿絵の挿入が多くみられた。そのそれぞれは、当時の読者の作品理解の一端をうかがうことができるものとして大変有用であると思われる、今後の考察にも活用することができたらと思う。

次に、各研究書に関しては、研究史において比較的新しく出版され、より自身の修士論文のテーマに関係してくると思われる文献を中心に閲覧し、必要と思われる箇所をコピーまたはパソコンに直接入力して持ち帰った。その中でも特に閲覧を希望していたのが、1976年から1996年の間に刊行された書誌 *Cahier de Gérard de Nerval* の第10号である。1987年に刊行されたこの第10号は、一冊を *Les filles du feu* に関する論考に割いたもので、私にとって大きな助力となるものである。求める第10号がフランスソワ・ミッテラン館には所収されていなかったため、所収されているアルスナル館へ赴き閲覧した。

また、決定稿となったD.Giraud編の *Les filles du feu* (1953)、ならびに *Les Roman miniature* からネルヴァルの

死後に出版された *Sylvie* の初版 (1955) のそれぞれを、貴重資料閲覧室にて閲覧した。 *Revue des deux mondes* へ発表された *Sylvie* (1953) の初出に関しては、ガリカにおいても参照可能であるため、開架されている fac-similé 版にて参照した。

< プログラムを終えて >

プログラム中は日々試行錯誤の連続であったが、困難に思う点や注意すべき点を知ることができた経験そのものが、今後フランス国立図書館はもちろん、海外のいずれの図書館を利用する際にも大きな助力となるであろう。

また、同時期に、フランス国立図書館にいられていたネルヴァルを専門とされている先生とお話する機会を持てたことや、研究に打ち込まれている先生方の姿を間近で拝見できたこと、そして、ともにこのプログラムに参加した他分野の仲間たちとの交流は、私にとって何にもかえがたい大きな励みとなった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初の計画では、*Sylvie* の舞台となったヴァロワ地方に関する当時の資料等に関する調査も企図していた。今回は、ヴァロワ地方を扱った研究書を閲覧するまでに限られたが、次回以降は、ネルヴァル作品に関わりのある他分野について、それらの一次資料と連動させた調査を行うことで、テキスト外にも考察の幅を広げていきたい。

この度のプログラムで設定した研究計画は小範囲であるものの、多様な手段を用いて文献を求めていく過程で、自身の研究課題について、今後改めなくてはいけない点、再考しなくてはいけない点等に改めて気が付くことができた。実際に得ることのできた理解はもちろんのこと、今後取り組み、消化していくべき課題を持ち帰ることができたことが、私にとって何よりの収穫であった。

派遣後の研究発表の予定

今回のプログラムで得た理解を修士論文執筆に活かし、今後の修士論文発表会にも反映させる予定である。